

となり、質的にも高く、いわゆる閑静な高級住宅地となつていった。

この推移は、自然の時の流れに任せたのではなく、土地の人たちが、いち早く状況を察知し、転入してくる人々の受け入れを考え、環境整備をしたからである。

特に、明治四十年、三十歳にして井荻村村長となつた内田秀五郎氏の町づくりは、後世に残る偉大な業績となつた。

内田さんが村長として手掛けた事業は、区画整理、水道敷設、電灯、電話、郵便、信用組合、青果市場など数多くあり、これらは、どれも荻窪の発展に欠かせない礎となるもので、中でも区画整理にたいする情熱は大変なものであった。

内田さんが村長として、まず取り組んだのは道路の改修であつた。

当時、井荻村は、主要道路といえども路面はほとんど修理されることなく、雨季とか豪雨のときにはまつたく泥海と化して歩くと膝まで潜ってしまう有様であった。農家は作った作物を市内に売りにいこうにも車軸が埋まってしまい、少しの雨でもどうにもならなかつた。東京府の費用が補助されている道路でさえその状態で、まして村道などの荒廃はひどいものであった。

そこで村長は、町村制による土木委員、道路保持員を選任し、協議のすえ村費から砂利代の五分を補助、関係者から五

分の寄付を受けることとした。

わが国に道路法ができるのは大正八年、この時に村内の全道路を実測し、二百三路線を町村道として認定した。

当時の井荻村は、戸数六百余、土地は宅地、原野あわせて九百余町歩のどかな農村であつて、道路を改修したといつても狭く、急な坂道も多く、住宅地として利用するにはほど遠いものであつた。村長は、数年の試行錯誤と研究を重ねた結果、まず、土地の区画整理をし、それから上下水道を敷設することを企画した。まさに、先見の明と言うべきであろう。事業は、工期十ヵ年、二百二十一万七千円余の工費をかけて完成した。道路造成のための土地は、すべて地主の人々の寄付であった。そして、長きにわたつた井荻町土地区画整理は、昭和十年（一九二五年）一月に完成されたのである。

井荻村の道路は様相を一変したのである。この碁盤の目で整備された道が、街の発展にはたした役割は言うまでもない。そして、ひと口に十ヵ年と言えば簡単に過ぎてしまうが、たつた十年でこの大事業を成し遂げたことは、いろいろあつたにせよ町の人々の熱意と協力があつたらからこそではないだらうか。

住宅地としての環境整備の礎、土地の区画整理ができると、次は、上下水道事業であった。毎日の暮らしに欠かせない水。

水道敷設の水源は善福寺池畔の揚水であつたが、水量は豊富で荻窪の需要を満たすに十分であった。この水は、きれいなばかりでなく「夏は冷たく、冬は暖かい」ので、その後、荻窪の住み易さの自慢の一つになつた。昭和十年（一九三五年）の荻窪の人口は三万五千人であったが、この水道は、十万人を越しても供給が可能であった。

この事業は、昭和五年に着工し、同七年三月には給水を始めている。

工事費は六十八万円（現在価値にして約二十億円）をかけ、うち十八万円は中島飛行機製作所東京工場（後に日産プリンス、現・日産自動車荻窪工場）の寄付であった。

荻窪に始めての電灯が輝いたのは、大正十年十一月十五日だつた。

「私が荻窪にきた頃は電気がきてなくて、電力会社に聞きに行つたらダメで、仕方なく自分で駅から細い柱を立てて電線を引いてきて電灯をつけましたよ。それから急に記者仲間や作家の方がご近所に引っ越して来られて……」と、

新聞社に勤め、いまは茶人不変庵として悠々自適の日々を送る田中秀さんは回想する、まだ、そんな荻窪があつたが、事業は昭和十年に完成した。

昭和三十八年から始めた町界変更と町名の改称は、住宅の所在のは整理都なり住宅地としての環境を整える意味は

大きく、現在への発展の礎となつたことである。

一方、生活面からみると「隣は、何をする人ぞ」という言葉で、山の手人特有の冷たさとして下町の人情と比較され、山の手の住み難さの一例として言われるが、今のマンション、暮らしの無関心とは全く別で、これは教養人の分別であり、お互いを尊重し自分を守つて長いお付き合いをしていく生活の知恵として生まれてきたのである。そして、荻窪を知れば、確実に会話があり、人情が生きているのがわかる。だから、転入者が生活の場として荻窪に馴染もうとすれば、荻窪は暖かく迎え入れてくれるはずで、土地柄として新しいもの大きく包む力を持っている。

このように発展してきた荻窪は、現在、緑豊かな文化のある街をめざす杉並区の真ん中で、代表的な生活環境をもつまではなっている。

しかし、そうした荻窪に問題がないわけではない。

終戦後、急速に伸びてきた商店街は、日常生活の買い物では便利で親しみやすいには違いないが、地域の恵まれた購買力に甘えて旧態依然とし、発展の遅れた商店の集団となりつあったからだ。まして商店街の性格も変わってきて、商店街が、物を買う、飲食をするというだけの時代は去り、歩行者天国の出現にはじまり人々の交流の場としての機能を持ち、

ケットができたことにあると言えるのである。

(2) 新興マーケットの誕生

戦後の荻窪の歴史は、ある一面では商店街の歴史といつて

も過言ではない。

戦後の食料難で、日々の糧を求めての生活から立ち上がった人々を支えてきたのが、荻窪のマーケット群で、復興し発展してきた町の様子を伝えるのが、そのマーケットを起点とす



天沼橋脇の国際マーケット跡（松葉襄氏提供）



新興マーケット（松葉襄氏提供）

さらには、カルチャーの提供もおこわれることが条件として求められるようになつた。

そうした流れについていけない荻窪の商店街は、その発展において、デパートや、新宿、遠くは銀座、そして近来ままに急速な発展をとげた吉祥寺等の商業地域に後れをとり、購買力の区外への流出現象を起こしていた。

そうした時、商店街の捲土重来を期して、まず始まつたのが荻窪駅前の再開発であった。そこに華々しく登場したのがタウンセブン、荻窪ルミネ、西友であつた。その出現によつて、周辺商店街も刺激され、杉並区の中心的な商業地域に発展した。

街の発展を論ずるに「街の発展は、二極の核が必要」、言いかえれば、二極の核がなければ街は発展しないというのが定説になつてゐる。

幸いに、杉並区で言えば、二つの核として阿佐ヶ谷に行政があり、荻窪は、経済の拠点であると言えそうである。日本では東京と大阪、アメリカでは、政治の中心のワシントンと、ウォール街のあるニューヨークを見る思いである。

荻窪を現在のような新しい街に成長させてきたものは何かと云ふと、それは商店街の発達にあるといえる。そして、その起爆剤は何かといえば、タウンセブンの前身、新興マーケットがその起爆剤であるといふべきである。

る商店街の発達だったからである。

昭和十八年、太平洋戦争が苛烈化して本土空襲が始まると、空襲による延焼を防ぐため、建物の強制疎開がおこなわれた。狭い道路を拡げ、中央線沿線は線路の両側を十五メートル、駅は周辺三十メートルにある建物は全て取り壊されて大きな空き地になった。

終戦後、こうした空き地にはいち早く露店が並び、道筋にまで溢れた。空き地が簡易マーケットに変わっていくのに、そう時間はかからなかった。代表的なところでは、日本DECのビルのあるところには国際マーケット、駅前通り商店街のところには引揚げ者マーケットができ、野村証券荻窪支店のところには荻窪市場があつた。そして、タウンセブンのところには、その前身の新興マーケットができた。

戦後の混乱期に統制経済となつて、食料難の当時、統制品を売つたため、一時的には闇(ヤミ)市と呼ばれたが、これらマーケットは、日々の糧を求める荻窪の人々に無くてはならない存在だった。また、ここには、荻窪ばかりでなく遠く八王子あたりから来る人々の生活も支えたのだった。

戦後すぐにできた、これらのマーケット群は社会が落ち着いてくると、その使命を終えたようすに消えて、新しい商店街へと発展していったのだった。荻窪では、昭和二十五年ぐらいかから国際マーケット、引揚げ者マーケットなどが無くなり、



建設中のタウンセブンビル (松葉襄氏提供)



現在のタウンセブン

荻窪に駅を中心とした一大ショッピングセンターができることに、地元からは大きな期待が寄せられた。

昭和五十四年七月二十四日、新興商店街は、青梅街道を隔てた旧第一銀行(現、渡沢荻窪ビル)の跡地の仮店舗に移転し営

やがて、戦後のマーケットといえば、新宿、新橋、上野のアメ横と、荻窪の新興マーケットだけが残っていた。それもマスコミを賑わしながら新宿、新橋と消えて新興マーケットだけが残り、相変わらず活気あふれ、親しまれていた。しかし、戦後のバラックで火災になればひとまりもない。そして、もう戦後でもなく、不燃化の目的をかねてビル化計画になつた。幾つかの計画案ができるは消えして行くうちに、やがて駅北口再開発計画が持ち上がつた。

再開発は、国としても取組み始めたばかりの事業ではあったが、新興商店街は、全国でもめずらしい民間主導型事業としてスタートした。それは行政指導のもと再開発指定区域に関係する人たちが自分達でお金を出し合つて自分達の責任でつくるということであった。これには、地主達の大変な理解と協力を必要とした。

計画は、マーケット跡地四、四〇〇平方メートルの敷地に地上八階、地下三階の商業ビルを建てて新しい型の商店街づくりへの取組みである。そして、隣接する国鉄用地には、それと呼応して、そのころ話題の駅ビルができることになった。このマーケットが無くなると知ったと人々は、戦後の生活を支えた雑踏の中での生活感あふれる買い物を懐かしみ、そして残念がつた。形はマーケットでも新しい商店街として機能し、地域の人々の暮らしと共にあつたからである。しかし、

業を開始した。事業のスタートである。

荻窪では、駅南口の商店街が北口より早く、初めての再開発計画の達成をめざしていたが足並みの乱れから北口に遅れをとる結果となり、タウンセブン、荻窪ルミネは確実に計画をすすめ、昭和五十六年八月三十一日に無事、まず再開発ビルが、つづいて、ほとんど同時に駅ビルが竣工したのだった。

新興商店街は、オープンに先立ち商店街名ともいべきビル名を一般募集した。数ある応募の中から選ばれたのは「タウンセブン」であった。

昭和五十六年九月三十日、ビル名を冠したタウンセブン商店街がオープンした。

住民は、喜びとともに荻窪の今後の発展に期待した。

しかし、一方では、お隣り吉祥寺の商店街にみる目覚ましい発展の代償ともいべき環境破壊を直視し、その二の舞を踏まないよう取り組む人たちがいた。青少年育成問題、車公害、駐輪問題など問題は山積していた。荻窪の場合、特に駐輪対策が深刻な事態となっていた。

そういう中にも、杉並区の環境整備は徐々にではあるが、進んでいった。

そして、新宿以西では最高の高さを誇る藤沢ビルができてアメリカン・エキスプレス・インターナショナル inc 日本支社が進出し、続いて、それより更に高いインテグラルタワ

機能化に力を入れ、更には景観街づくりへと展開していくった。

道路は、掘つたり埋めたりの繰り返しに住民からの苦情は絶えなかつたが、ガス、上下水道の敷設はすすみ、舗装化も私道までされて確実に整備されていった。そして時とともに、その時代を背景に街は変わつていつた。

青梅街道北側を流れてきたきれいな用水は、あさひ銀行

(元・協和銀行) 荻窪支店の駅側を曲がって、天沼八幡の前で弁天池から湧く水と合わせて天沼一帯の田を潤しながら日大幼稚園の前を東へと流れていた。あさひ銀行の角を青梅街道の追分といつて天沼たんぼと南にくだる成田たんぼ(西田たんぼとも呼ばれた)の田用水の分岐点になつていて。ここで弁天池方面にいく用水と分けた一方の用水は、旧青梅街道(〇〇頁参照)の北側を側溝の形でそのまま大踏切を径由して成田に流れ、たんぼを潤していた。しかし、青梅街道の拡幅整備によって分断されると、やがて下水管が敷設され埋められて、用水溝は跡形もなくなくなってしまった。

天沼方面の用水路は、その後も流れていたが、住宅地域の発展で生活用水が流れ込み下水道化していった。そこで、これを暗渠化しようという計画になつた。桃園川改修暗渠化工事といわれ、昭和四十年(一九六九年)三月に着工され同四年三月に完了された。ここはその後、幅四・六メートルの生活道路として開放された。そして、駅近くの一部は、今は



あさひ銀行荻窪支店

駐輪場不足の解消のために駐輪場として使われているが、カラーブラックアッシュで舗装されてから近隣住民の楽しい遊歩道になつている。

街の機能化に道路の舗装化は絶対必要なことであるが、達成されれば、次は、景観である。



ルミネ工事 昭和55年3月(松葉襄氏提供)

一大林ができると日本デイジタルイクイップメント株という世界的企業、その他各企業の進出があつて、荻窪の街を大きく変貌させている。

(3) 景観街づくり

戦後の混乱期を過ぎた日本は、経済の成長とともに、街の

街路灯はきれいに明るくなり、街路樹など植栽され、商店街を中心にカラー舗装がすすめられた。

警察署長が「明日、来てください。いいお知らせがあります」と、喜色満面に言ったが、それは、環状八号線の管内

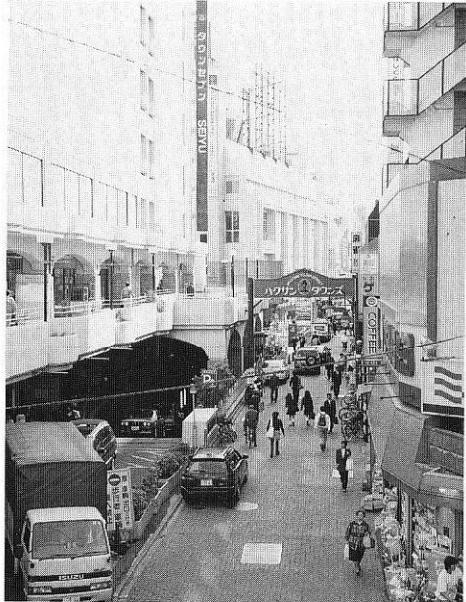


桃園川暗渠化跡の遊歩道

加えられた。

諸外国に見られる、完成された街には欠かせない公園も、まずは、児童公園から次々とつくられていった。子供たちが遊べるだけであった空間にも工夫が加えられた。昔の遺跡を地下に抱く松溪公園、水の流れる公園や、アスレティック公園、さらにはテーマ公園への展開であった。たとえば、歩いて杉並を知つてもらおうと考えられた散策ルート「知る区ロード」の一つに、天沼三丁目の「ときのオアシス」がある。入口には「時の門」という巨大時計があり、「地界の大庭」がある。ここにはタイムカプセルが埋められていて中には「巨大なびっくり発見マップ」と「二十一世紀の自分への手紙」が入れられている。二千一年八月十二日まで開けることができない。自然を生かした古くからある妙正寺公園にも、ただの池ではなく噴水を付けたり花壇をつくったり整備されてきたが、杉並区はさらに緑のある文化都市をめざし、亡くなつた音楽評論家の大田黒元雄氏の樹々のおい茂る広い敷地を買収し、整備し、森と水の自然公園として「大田黒公園」を誕生させた。いまは区の代表的公園として区民に親しまれ、憩いの場所となっている。

また周辺では、蚕糸試験場、気象研究所、機械技術研究所など筑波への移転にともない、広大な跡地は、災害に対処した「避難広場を兼ねた公園を中心とした区民の施設」に整備



白山通り

(4) 商店街とカラー舗装

街の機能化が進むと、人々は街の美しさを求めた。言つてみれば街のお色直しといったところである。その中で、環境整備と活性化のために大きなウエイトを占めた一つに道路のカラー舗装化があつた。商店街を中心にするめられてきたこの事業は、まず、荻窪駅西口の白山通りにはじまつた。

一口にカラー舗装というが、ともなつて街路灯やモニュメントなども含める環境整備だけに、かなりの費用がかかる。



天沼橋脇の日本DECビル

区間に植栽される話であった。道路沿いに街路樹とツツジの緑がつづき、春には花を咲かせ、荻窪の暮らしにうるおいが

たとえば、カラー舗装でいえば、通常のアスファルト道路舗装は区でおこなうので問題はないが、カラー舗装となると、それは道路の機能を越えた付加価値としてよりきれいになることは地元のメリットとされ、カラー舗装条例に基づき、その材料費、工事費など全費用を区と按分し地元が負担するという具合である。

荻窪で最初のカラー舗装化をしたのは「白山通り商店街」であった。この商店街は、タイミングといい条件といついていた。ちょうど、新興商店街(マーケット)と西友ストアが再開発に入り、タウンセブン、ルミネの誕生、そして、杉並区がカラー舗装事業に取り組み始めたところで、この波にのったからだ。

というの再開発にあたっては大型店舗の進出が周辺商店街に及ぼす影響を考慮し、白山通り商店街の場合、西友ストアから環境整備資金が出されたからだ。商店会は、これに自分たちの資金を合わせ、どの商店街より早くトップを切って、青梅街道から環状八号線間の同商店街の通りをレンガ色にお色直したのだった。街路灯も整備され、立派なモニュメントもできたのは、昭和六十年八月であった。

このブロックの舗装は、部分補修ができるのと下地が砂で親水性であること、そして、音を吸収するので車の騒音を押さえることができる所以良いとされた。

に複々線となるたびに境内は狭くなり、本堂を移設するまでになつていった。それだけではなかった。環状八号線も境内を削つたのである。どこにでもある普通の生活道路であつた環状八号線は交通量の増加につれて道幅をひろげた。踏切は大踏切になり、道はさらに拡幅されたが、やがて立体交差になつて環八の側道と地下歩道ができるなど、そのたびに境内はさらに小さくなつたのである。

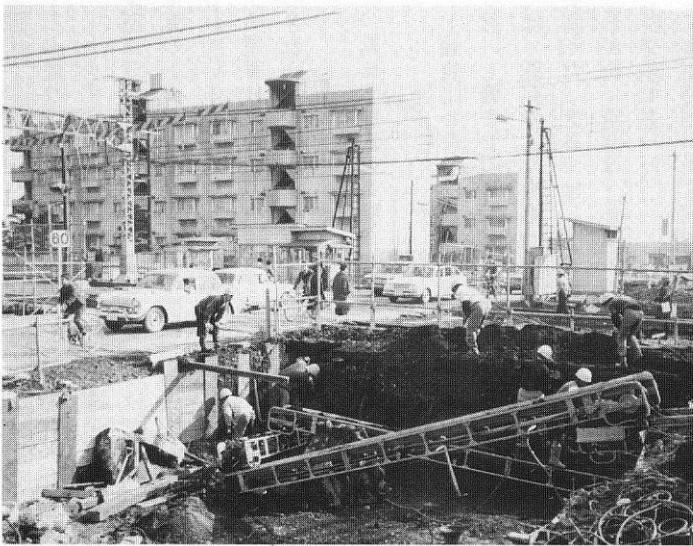
光明院への観音通りが白山通りになつたのは、駅西口の開設、タウンセブンの開店で通りの商店街化がすんだからである。

この通りは、駅に隣接していながら商店はまばらで、周辺の発展をよそに相変わらずの生活道路であった。宇田川庄右衛門さんの用地提供で駅西口ができると通りは活気つき、商店が並ぶようになつた。商店街の礎ができたのである。商店会ができたのは、駅北口の再開発が進み始めた頃であった。個々ばらばらの通りの商店が、まとまつて良い商店街にしようと立ち上がつたからであった。

結成にあたつて、商店会名を付けることになり、「観音通り」

も含めていろいろ出たが、総会の多数決は「荻窪白山通り商店会」であった。その理由には、白山神社が商店街に隣接していること、商店街の人たちに氏子が多いことなどがあった。その後、商店街の発展とともにあって、商店会名に冠した「白山通り」が、ここ通り名として広められたのである。

白山通りにつづいてカラー舗装になつたのは、駅西口の南側から環状八号線まで通じる「すずらん通り」であった。



環状八号線立体交差工事 光明院前(松葉襄氏提供)

カラー舗装をするにあたつて、当初、区は「相互対面通行道路では予算を組む対象にならない」という道路上の制約を前提として計画の受け入れに難色を示した。しかし、準備を進めていくうちに、NTTや東京電力が線を道路地下

カラーブラック化の一連乗りをはたした白山通り商店街は、大きな商店街の中では創立が新しい。しかし、この通りの歴史は古く、「観音通り」といわれたこともあった。古寺である光明院の創建とともにできた荻窪の最も古い道で、青梅街道ができた時、この道の出会いを「観音おんだし」とい、光明院までを「観音みち」その後「観音通り」と言ったことによる。「おんだし」とは、おおきな道との出会いの呼名で使われるが、青梅街道へ押し出した道が訛つて「おんだし」になったのである。光明院は、和同元年(七〇八年)に開基された真言宗の寺で、別名「荻寺」と呼ばれた。荻窪の地名は、この寺によって生まれたといふ。創建当時は、七堂伽藍の格式をもち、近隣近在からお参りする人が絶えなかつたといふ。「観音みち」は光明院へ通う道であつた。

光明院は、広大な寺領地を持つていたが、時代とともに削られしていく。大きく寺領地を減らしたのは、明治政府の宗教政策であった。そのひとつとして明治元年(一八六八年)、祭政一致を図つて神仏習合を禁じた神仏分離によつて、寺領地は四つに分けられたのである。一つは、荻窪八幡神社に加えられ、一つは荻窪天祖神社に、一つは、荻窪白山神社の持領となり、残る一つだけが光明院のものとなつた。さらに減らしたのは、甲武鉄道の開通であった。計画線は、新宿から八王子まで武藏野の野をまっすぐ一直線に引かれ、その線が光明院のまん中を突つ切つていたからである。そしてその後、荻窪駅の開設にあたつては持領にかかつた土地を駅用地として献納したのである。その流れはとどまるとはなかつた。中央線が単線から複線さら

に埋設することになり、また、東京ガスは七十年もたつて古くなつた水道管の取り替え時期になるという、工事が偶然にも集中することになった。そこで区としても、この機会を生かしそうということになり、まことに幸運なタイミングで力

ラー舗装化ができた。

すずらん通りは、現在、道路幅七・五メートルで道路両脇に一メートルずつ歩道区分が設けられて、車道部分はレンガ色、歩道部分はグレイ、境は白色のブロックで構成されている。電気のトランクの設置場所の問題があつて、片側に電柱が残されているが、もう片方の電柱は取り払われ、道路上を交差する電線はなくなり、カラー舗装によって以前に比べて格段にきれいな景観を呈している。

次に、カラー舗装を実現させたのは“荻窪南口商店会”であつた。

カラー舗装したのは、この会の駅南口前から善福寺川にかかる忍川上橋までのメインストリートの「仲通り」だった。ここでは、既存のよりももっと品質の良いものを使いたいと区に要請した。区外では、すばらしいブロックを使っているのに、わが街、荻窪は、杉並区はおくれていると見本を持ち込んでの交渉であつた。

既に工事を終わった区内の他の商店街の関係から、そのレベルでの承認に区は苦慮したが、ここをモデル地区指定とすることでブロックのレベルアップを認めることになり、着工の運びになつたのである。

この通りは、ブロックの色を路面の汚れを感じない白っぽ

いグレイを基調に選んでいるが、材質の良い大理石調のブロックで路面は輝いた。そして、道路工事に先立ち、街路灯はシックでしゃれたデザインのダークグリーンの柱にし、アーチも改修すると、駅南口仲通り四六〇メートルの商店街は、景観を一新した。それにしても、この商店会の努力の結果、以降のカラー舗装がレベルアップされたことを思うと、この商店会の功績は大きい。

南口仲通りのカラー舗装と同時におこなわれたのが、駅西口・日の出街である。今まで実施された通りが全て区道であったのに対し、ここの大半は私道であった。それ故

に難しい問題があつたが、商店会の強い要望の実が結び、私道では初めてのカラー舗装化がなつた。

駅西口白山通りから亀屋酒販ビルまでの道路と、青梅街道の住友銀行からその道に通じる私道部分がまず舗装され、青梅街道から亀屋酒販ビルに沿つた商店街の区道部分は区の予算の関係で、着工が翌年まわしなつたが、無事完成した。

この商店街は、荻窪のなかでは代表的飲食店街である。一口に言えば飲み屋街で、裏通りの暗いイメージがあつたが、

グレイとレンガ色の濃淡の三色を組み合わせた上質のカラーパ



南口仲通り



南口すずらん通り



日の出街

舗装で明るく変わった。これを機に「今まで以上に営業姿勢を正し、犯罪のない明るい街づくり、安心して飲める通り」をと商店街は喜んでいた。

これらの商店街に刺激されて、立ち上がったのは“教会通り商店街”と“寿通り商店街”だった。その頃になると、次々とカラー舗装化されたが、同時に荻窪周辺をはじめ杉並区全域の商店街が名乗りをあげてるので順番がまわってくるのは大変なことだった。



八幡通り商店街



寿通り “グリーンロードことぶき”



杉並で最初にできた銭湯 “寿湯”



教会通り

大震災の時にはN H K の助け合いに協力するなど、商店街活動は活発化した。

教会通りの名は、文字どおりセブンスデイ・アドベンチスト教会があったからである。大正三年、同教団が天沼の中谷戸(天沼三丁目)に土地一ヘクタールを買い求め、からたちの垣根で囲み、三角屋根のレンガ造りの教会と赤い屋根の二階建てのしようしな西洋館を四棟建て、多数の外国人牧師が行き来するようになると、ここは異国情緒がただよった。夜になると煌々と電灯の光が窓に輝き、薄暗いランプの光で暮らしている農家の人々には、一大不夜城に見えたという。大正八年四月、併設のミッションスクール天沼女学院が開校した。区内最初の

教会通りの舗装化は、平成二年から計画が順調に進められ、平成五年十二月五日に完成、教会通りのイメージにあつたスタイルに一新した。ここは、駅南口商店街とおなじ大理石調のものを使い、ステンドグラス様の街路灯が映えている。他の街にみられないこの特徴は、初めて音を取り入れたことである。「鐘の鳴る

街、教会通り」ということで、ウエストミンスター寺院の鐘をイメージしたという鐘の音が、街路灯のスピーカーから時報を知らせ、また、BGMが流れている。その後は、完成記念のイベントが毎年歳末に催され、関西

る。

タウンセブンの正面を青梅街道からセブンスデイ・アドベンチスト天沼教会へとづく約五百メートルの賑やかな通りが教会通りであるが、その西に平行している、“八幡通り”とともに、天沼から荻窪駅に通じる重要な生活道路となっている。天沼周辺から駅に通じる南北の道が他にないからである。寿通りは、杉並区で最初の銭湯(お風呂屋さん)寿湯が通りの入り口のカドにあつたので付けられた名称で、八幡通りのバスとしてあり、小さいがまとまった商店街を形成している。

天沼周辺から駅に通じる南北の道が他にないからである。寿通りは、杉並区で最初の銭湯(お風呂屋さん)寿湯が通りの入り口のカドにあつたので付けられた名称で、八幡通りのバスとしてあり、小さいがまとまった商店街を形成している。

女学校で、駅をつかってかよう良家の子女で、通りは華やかな賑わいを見せた。

また、「医療伝導は、福音の右腕」という教えのもとに、教団が、アメリカからゲツラフ院長を迎えて教会敷地内に教団の医療施設を開いたのは、昭和四年四月であった。以来、信者はもとより、近隣からも多数の人々が通院した。当时、近くに医療施設がなかったこともあるが、清潔な病院に献身的な治療が評判を呼んだからである。そして、今日まで地元の身近な病院であり、全国にその名を知られる東京衛生病院に発展したのだった。

太平洋戦争がはじまると外国人牧師と医師たちは国に引き揚げ、昭和十八年九月、後を守っていた日本人牧師たちが治安維持法違反で検挙されると、教会、女学校は閉鎖され、土地建物は東京新聞社へ強制売却させられた。そんなことで、戦後しばらくして教団に返還されたが、一時期、ここで東京新聞の印刷がされたこともあった。

戦後、青梅街道から通りに入つてすぐのところに、しゃれた「赤い屋根」という喫茶店ができた。まだ喫茶店が珍しい頃で、教会通りを、より一層ロマンチックなイメージにしていた。

教会通りは、以前、少なくとも終戦までは、一般的に“弁天通り”と言っていた。通りの奥には、池の中の島に弁天様が祀られている天沼弁天池があつたことから、そう呼ばれていた。“この通りの昔は、道幅の狭い農道で、俗にいう九尺道路だった。昭和十九年、戦争が激しく空襲も頻繁になると建物の延焼防止ということで建物強制疎開が命令された。弁天通りの取り話がもちあがった。



昭和51年ごろの弁天池（松葉襄氏提供）



荻窪銀座街

当時、荻窪駅北口には、大きな商店街として新興マーケット、銀座街、北口大通りの三商店街があつて共通売り出しをしていました。後に荻窪北口商店連合会ができるとき核となつた

たえ、昔を偲ばせる唯一の場所になつてました。その池を半分使つた古雅静寂な泉庭の美しい、北京料理の池畔亭があつたが、一方交通規制になつてから交通不便になり、車利用のお客の多かった同亭は経営不振おちいり店を閉めてしまつた。また、池のあと半分を利用した貸席があつたが、年々水が涸れてくれる

壊しは、道の西側の家並が対象となつた。まず荻窪駅前、そして教会通り、若杉通りへと実行された。初めの頃はていねいに壊していたが、後になると壁をとると屋根はそのままに四方の柱にロープをかけて引つ張り倒した。教会通りは、疎開で家がなくなつて道は広がつた。しかし、戦争も終わり、元の地主に返還されると新しく建物がたち、以前のせまい通りに戻つてしまつた。現在の教会通りは商店街としては狭すぎるのに、杉並区の建築基準で四メートル道路の必要がいわれているが、そなままでできなかつた悔やまれるところである。

その頃の通りは、商店、お医者さん、住宅が混在し、しかも四十数軒しかなく、とても商店街とはいえたものではなかつた。そうこうしているうちに、商店がぼつぼつ開店して徐々に駿隣商店街の形が備つてくると、街路灯をたて通りを整備しようということになつた。ところが、町会も商店会も一緒だつたので、全く商売に関係ない人もいて何かと話をまとめてくく、将来のためには商店会を独立させたほうがいいという動きが起つたのである。

弁天池は、「天沼」の地名の発祥の地とも言われ、美しい沼だった。

商店会であるが、商店街として整いはじめた教会通りは、この売り出しに参加しようとすることになった。そして、これをきっかけとして昭和三十年、ごく自然に弁天通りの名から“教会通り”という名を冠した新しい商店会「荻窪教会通り新栄会」が発足したのだった。

(5) 荻窪北口大通り商店街と銀座街

現在 カラー舗装化に取り組んでいる荻窪北口大通り商店街は、その初めは昭和二年に結成され、商店街として荻窪で最も古い歴史をもつていて、ここで、荻窪の商店街の流れを知るために、荻窪北口大通り商店街の発展の過程を見ることにしよう。

のどかな純農村風景を見せる荻窪に最初にできた店といえば、汽車の待ち合いとして、駅で唯一の乗降口であった南口前でできた茶屋“稻葉屋”であった。明治二十五年七月の荻窪駅が開設された約一年後に開店している。田畑と林に点在する家、人々の暮らしにたくさんの中の商店はいらなかつた。それが、駅付近の商店を中心とした商店街にまで発展する起点となつたのは、大正十二年の関東大震災にあつた。市内の復旧が始まると、人々は被害もなく商品在庫の多い荻窪の商店に買い出しに殺到したのである。その頃は、まだ数少ない商店ではあつたが駅前にポツポツあつて、買い出しの人々の対応

沿いにある工場に通う工員のため、駅北口に乗降口が欲しかつたこともあつたが、北側の住人の不便を考えると設置に真剣だった。この交渉で、矢島商店が店舗用地を残すことを条件に必要とする土地の提供を快く承知して、駅北口開設準備が整つたのである。

昭和二年（一九二七年）の春、荻窪駅北口が開設された。

それと合わせて、各商店の発展のために「北口通り協和会」が結成されたが、これが荻窪で最初の商店会の誕生であった。

この会は、最初、駅周辺だけでつくられたが、その後、四面道側に「商栄会」ができため両者の合併を協議されるところとなり、その結果、合意に達して、翌年、駅前から四面道までの長い商店街「北口通り商工会」ができたのである。「荻窪北口大通り商店会」の前身である。

その頃は、まだ商店だけで商店街をつくる力はなく、蹄鉄屋や、農具ほかに使う棒を作っていた棒屋などいわゆる工業

関係を入れた「商工会」であった。会としてまず始めた事業は売り出しがあった。

当時、北口の開設がなつても、まだ、乗降客はまことに少なかった。

町の乗り物といえば、タクシー二台と、人力車が二台しかなかった。駅北口の開設によって、やがて、バスが入るよう

にてんてこ舞いしたが非常に繁盛した。震災の混乱もおさまり落ち着いてくると、市内の人々は、そのころ郊外と言われた荻窪方面に家や土地を求めた。人口の急増に加えて地主の好景気は、駅の南北の商店に繁榮をもたらす結果になった。この景気に支えられて、大正十三年（一九二四年）、南北の商店が集まって今後の発展策を協議したところ、「実業連合会」を結成することになった。まず初めにおこなつた事業は、「歳末の売り出し」であった。これは商店がまとめておこなつた荻窪で最初の売り出しであった。しかし、この連合会は、駅の北口が開設されると解消してしまった。

荻窪の駅北側周辺を大きく発展させたのは、駅北口の開設である。

駅開設以来、長い間、荻窪駅は南口のみの乗降改札であつたため、北側の住人は、鉄道を利用しようとすると、駅から離れた東側の踏切を南側に大きく回らなくてはならないので、非常に不便だつた。町が発展し、人口が増加するにつれて、当然のことながら駅の北口の開設の要望は強くなり、大正十五年七月、駅北口開設期成同盟ができたのである。

同委員の内田秀五郎さんが、さっそく、駅の北側に隣接している矢島商店に駅の出入口をつくりたいので少し移転してほしいと交渉した。内田さんは、周辺の村の二、三男就職対策として荻窪に中島飛行機製作所を誘致した人で、青梅街道

になると、ようやく便利さが備わり、急速に住宅も増えている。荻窪の大きな発展は、この時から始まつたが、ちなみに、昭和五十年度の荻窪駅の乗降客数は、約十六万人にものぼつてゐる。

昭和四、五年頃から駅北口周辺に商店が急増した。

青梅街道は相変わらず元のままのデコボコ道でホコリを舞い上げていたが、道の両側には次々と新規開店した。

この間、駅北口前に「日の丸市場」が開設された。荻窪としては初めての大きなマーケットで、連日のように鳴り物入りの宣伝で人気を集めえた。その影響を受けてか、大踏切の近くの青梅街道（旧）に面した魚茂の大堀さんたちは「西武市場」をつくり、駅前には「荻窪市場」ができた。そして南口にも市場が開設されたが、共に賑わつた。この頃になると各店が競い、意欲をもつて商売に力を入れたので、急速に商店街へと発展した。

日本DECのビルがある陸橋の西側一帯は原っぱで、青梅街道と八幡通りの交差するところに「高砂館」という映画館ができた。荻窪で唯一のレジャーだった。

昭和七年、井荻村と杉並村、高井戸村、和田堀村の四村が合併して杉並区となり、東京市に併合された。これを祝つて商工会は、原っぱ（現・あさひ銀行のあるところ）で盛大に演芸会を催すなど、活動は盛んだつた。

昭和十四年、青梅街道が拡幅整備されると、商工会は街路灯建設の大きな事業にとりかかった。近隣には立派な街路であった。建設資金の拠出は、受益者負担ということで、それぞれの条件で負担額を出して完成したが、土地所有者の協力は大きかった。

この頃から支那事変の戦火はひろがり、昭和十六年十二月



突き当たりに大踏切、右側に高砂館があった

八日、大東亜戦争に突入すると国を上げて戦時体制にはいった。店も各業種の整備統合で転業をよぎなくされ、労働員のため店主も店員も出て困難な時代を迎えた。戦争で物資の統制が厳しくなり、さらに転業廃業が続出した。この頃の物価をみると、米一升三十六錢五厘、酒一升七十五錢、味噌百匁八錢、木炭一俵一円五十錢ほどだった。

この年の十二月二十一日、荻窪駅開設五十周年を迎えた。この日、記念祝賀会を催し、商工会役員と近隣の有志は荻窪駅長とともに白山神社に記念碑を建立し、記念の樺を境内に植えた。この木は、今は大きく成長している。

戦争は激しくなり、昭和十九年頃には、駅周辺は建物も道路も強制疎開が始まつた。北口、南口とも広い範囲にわたりて、長年かけて築き上げた店舗も住宅も惜しげもなく取り壊された。これは第一次、第二次とつづいた。

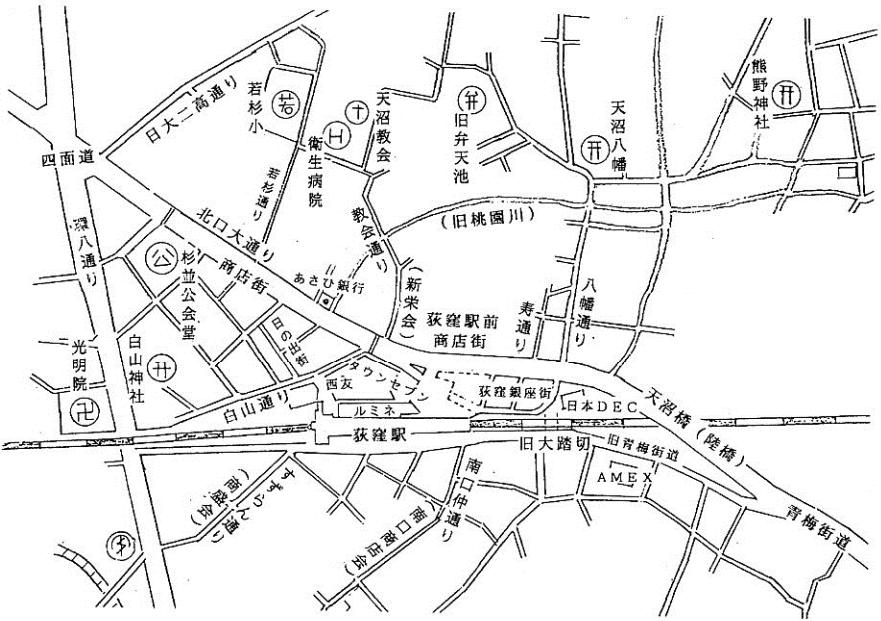
そうした状況において、北口商工会は自然解消したのだつた。

終戦時は、駅前をはじめ道路も疎開跡地は原っぱそのままの空き地になつていて、復興が始まつたといつても、店を開くには至らなかつた。しかし、駅近くの商売をするのに条件のいい疎開跡地は、元の店舗が復帰しない前に早くも簡易マーケットが建てられた。道路には露店が並び、さながら青空市場のようであつた。初め、マーケットは闇(ヤミ)市と言わ

れた。統制経済の網の目をくぐつていいろいろな物が売られたからで、どこも物資不足と思えないぐらいの品物が並び大繁盛した。荻窪周辺はもとより、遠く八王子辺りからも買物に来るほどだつた。

空き地という空き地に店ができ、駅を出たところから店が軒を連ね、駅前広場は無かつた。駅前広場ができるのは、その後、駅前のマーケットが原因不明の火災で焼失して空いた所を確保し、形ばかりの広場ができたからである。今は、未完成ながら整備してバスター・ミナルになっている。

駅から東の旧青梅街道ぞいは、旧店舗が戻つたり新規開店があつて商店街としての様相が戦後早くから整い、商店会として“荻窪銀座街”が誕生した。從来、銀座街は商工会の加盟範囲であつたが、商工会の復活が遅かつたので独立した商店街になつたのだった。北口商工会は銀座街との合体をいろいろ協議したが不調に終わり、以降分割のままになつた。駅の南北から買い物客を集め銀座街は、通りに柳を植えて、その名が示すように、荻窪の中心的商店街として栄えていった。しかし、中央線の発展は南北に通行便利な踏切を「開かずの踏切」とし、ついには閉鎖してしまつた。南北交通が遮断されて通りが袋小路化すると銀座街の交通量は見る見るうちに減少し、それと共に買い物客も減してしまつた。その結果



荻窪商店街街路図

果、あれほど隆盛を誇っていた荻窪銀座街も寂しい商店街になってしまった。

今、荻窪銀座街は、新しい商店街への脱皮が求められている。活性化の方策として、区の指導を得て再開発にむけて努力

力している。

ところで、戦争中に無くなってしまった商工会は、戦後の復興の兆しに旧役員たちの間で復活を協議され、その結果、昭和二十二年「荻窪北口大通り商店会」として再出発することになった。



閉鎖された大踏切

ちょうどその頃、未完成だった陸橋が開通し、従来の青梅街道(旧)に対して裏通りであつた駅北口交番から陸橋までの現在の青梅街道が拡幅整備されると、商店会は、陸橋の西側、八幡通りの交差点から四面道までを商店街の範囲としたのだった。その後、環境整備としてアーケードをつくったが、全長で千百七十六メートルという東京一長いアーケードをもつ商店街となつた。アーケードは総工費二千六百十八万円をかけ昭和三十三年六月に着工、二年をかけて十二月に完成させた。大好評で、これによつて商店街は活気づいた。景気の上昇も手伝つて、さらに良いモノにしようと、第二次アーケードの改築計画がされた。改築は、総工費八千二百八十万円をかけ、着工後二年目の同四十九年三月に完成した。当時としては、全国のモデルになる程の立派さであった。そうした努力に支えられ、荻窪北口大通り商店会は商業活動は活発であつた。吉祥寺など周囲商圈の急激で大きな発達は荻窪の商店街に影響を及ぼし、時の流れではあっても商店経営を圧迫

してきた。これに負けないようにと商店会は法人化で体制を立て直そうと街の活性化と発展に努力している。“荻窪北口大通り商店街振興組合”的設立である。

法人化なつて荻窪北口大通りが、今、計画を進めているのは景観街づくりである。

カラーブル装化を主とするこの計画は、アーケードの耐用年数を目前にしていろいろ検討した結果得た結論で、アーケードを無くし、オープンモールを目指すということである。

検討当初、長年親しまれて便利なアーケードを壊すことはない、改築して何とか残したいとする意見は多かつた。しかし、直すとするとメートル当り九十万円は下らないという建設費用の負担は商店の肩に重くのしかかってくる大きな問題であった。雨の日にはお客様にとって便利という意見もつてあつたが、一年の内、雨の日の比率はわずかといふこともあり、しかも世の中の流れは、アーケードの無いオープンモールの方向にあることであつた。杉並区では、その方向でアメニティ・タウンづくりに助成金を出して商店街の活性化を図ろうとし、また、青梅街道は都道であるため都でも、そうした商店街に助成をするなど勘案し、計画実行に当たつて条件が整うことで、総会でカラー装化が決定したのだつた。

ただ残念なことに、青梅街道ぞいの長いがまとまつたこの商店街は、商店会を法人化することで意見を異にし、駅前を



北口大通り商店街

境として陸橋側ブロックと四面道側ブロックとに二分してしまった。現在、四面道側の「荻窪北口大通り商店街振興組合」が、この計画を進めている。

ここでも歩道を使った杉並区の有料駐輪場大きな問題になつていて。歩行者にとって障害になり、危険があるからで、商店街にとどても、それを進めた杉並区式とつても頭の痛い問題で、街の活性化は、この解決いかにかかっていると言つても過言ではないといえる。

いずれにせよ商店街は、街の活性化のためのカラー舗装化におおきく歩み始めている。完成すれば、きっと、楽しい街になるであろう。

荻窪の将来に向けて

荻窪の発展は、荻窪駅の開設に始まり、住む人々の力に支えられてきた。

街は人がつくり、人は街によってつくられる。その意味において、街の将来を考える時、街は、その街の歴史に学ぶところが大きい。

静かな農村であった荻窪に急激な人口増加をもたらしたのは関東大震災であったが、この時、整然と区画整理され基本

的に住環境が整つていたことが、その後の荻窪の発展に大変な力になっている。そして幸いなことに、最初に移住してきた人々が、いわゆる知識人、文化人であったことが、そうした人たちの集まるところとなり、その後の街をハイレベルな住宅地へと成長させていった。戦時中は高級軍人の多く住むところとなつたが、戦後は以前にも増して官財教育界、企業で活躍する人が住むようになり、質、環境ともに住む街として成熟してきたが、しかし、それは、あくまでもベッドタウンという意味の住環境の良さの延長線上にあり、高級住宅地化を志向し求めてのことであった。現在それを考えると、手放しで喜ばれることはなかつた。街としてバランスある発展とは言えないからだ。

残念なことに、荻窪の人々は、日本を世界を、また自分の専門分野において活躍し影響を与える動かしていくも、足元の街づくりを考えることがなかつたし、わが「街づくり」にパワーを集めて結果を出すことをしなかつた。これには、荻窪を出て、容易に世界の文化に触れられるし、教育の場もあり、ビジネスもあれば、望む買物もできるという荻窪を囲む環境のよさに原因があり、荻窪の人の広い生活圏によるものであつた。その結果、荻窪を故郷として独立化した機能を備えたアメリカティタウンとして捉え行動に移すことしなかつた。

荻窪は原水爆禁止運動の発祥の地である。荻窪公民館で放

射能汚染について議論され禁止運動となり世界に広まつた。ヒロシマに移つてはイデオロギーを利用して運動そのものが翻弄された事もあつたが、元は荻窪の純粹な住民運動（パワー）であった。確かに、日本を世界を動かし影響を与えてきた人々がいるが、わが故郷の街づくりに何を残したかとうと考えてしまう。

これは、荻窪の人々が、行政区を越えた自分の生活圏をもつ都會人であるからだらう。だから、荻窪の人たちが何もしなかつたといふより、単純に、良い環境に満足していく、わが街に自分の力の影響を与え残すことを考えなかつた事であるかもしれない。しかし、その力は無形の財産として歴史的にはある。今、それを荻窪の「街おこし」に期待するところである。

現在、荻窪の街に求められているのは、独立性のあるバランス機能を持った住環境ではないだらうか。一極集中ではなく、地方の時代が叫ばれて久しく、街おこしがトレンドであるが、これは“流行”ではなく“必要”である。わが街に求めることは何か、欠けているものは何かをハード面、ソフト面で考える必要がある。

たとえば今、東京の交通網の弱点である環状八号線で結ぶ「エイトライナ

ー」計画を関係区がござつて推進している。地下鉄方式で荻窪を通るルートで荻窪に駅ができるはずである。街にとって、この交通システムがどう影響するかは大きな課題である。荻窪のパワーを外に分散させるか、外からパワーを吸収することができるかである。

活力ある街にするためには、まず「人が集まる」ことを考えたい。その場として、どうやら商店街が発展し力をつけてきたが、お互いが情報をえて交流する場としては格好で、そのレベルでは地区民センターなどもある。しかし、まとまつてパワーとするには、最終的に大勢の人が集まるる多目的大ホールやシティホテルが必要だ。杉並公会堂や新しくできたセシオンでも、杉並区には小さすぎる。平等、機会均等もいいけれど、どうも杉並区は総花的すぎる。図書館、体育馆、児童公園、福祉会館等の建設や、防災設備の充実など、区民全体に地域的に公平にと考えるのはわからないでもないが、求められる必要にして十分な規模をもつ施設がなくて、他の区にそれを求めては杉並区は機能しなくなるだらう。

福祉に力をいれる杉並区は、高齢者を弱者としての視点で扱い、施設などにも目を向ける傾向にあるが、元気な老人たちははどう対処するのだろう。例えば、美術館やカルチャーアーは若者同様に老人も施設を利用できる。医療センター施設は杉並区の中に核として欲しいところである。できあがつた

宅地の中にスペースを求めるのは難しいので、再開発地域からおこしてはどうだろう。

荻窪は、地域として必要な機能を備えるための施設を備え、また、イベントを盛んにするべきで、そのためには、今までの街づくりに加えて更に、文化的後背地をもつバランスのとれた今後の街の発展のために「街おこし」をみんなで考えていくことが急がれる。今回、誌面の関係で地域コミュニティの歴史にまで及ばなかつたが、要は歴史に学んで欲しいものである。

父祖から築いてきた荻窪が、他所に頼ることなく、独立性を持った地域社会として故郷荻窪であることを誰でも望むことではないだろうか。

松葉 裏・稿

本稿は杉並第五小学校創立七十周年記念誌「新 天沼・杉五物がたり」から著作権者杉五同窓会の許可を受け転載しています。執筆者は 松葉 裏 氏です。